

原田覺教授のご退職にあたって

原田先生がご定年まで一年を残して辞められる。往年の専攻学生にとつては、あの原田先生が体調を崩された、ということだけでも何か想像もできないくらいで、とにかく、とても信じがたいことだと思うだろう。原田先生は、そのくらい、元気だった。熱かった。激しく、人をも自分をも徹底して追い詰めた。そして、最後は、温かい。

先生の研究スタイルは、テキストを「カバー・トゥー・カバー」で、コツコツ徹底して読み通す、厳密に文献学的な姿勢である。そのまっとうな在り方に比べれば、実は「哲学学」にすぎない日本の「哲学」の甘さは許せない。自分で考える、ということとはもっとずっと厳しいものでなければならない。一緒に酒を飲むと、必ずそういう話にもなった。私は今でも、これに十分に応答することができないでいる。

先生が赴任されて本専攻に所属されたのは1990年。バブルがはじけ、その後、現在まで続く平成大不況にさしかかる頃である。だが、私立大学は第二次ベビーブーム世代の受験生に支えられていた。

1993年の2月初旬だったか、先生は<改革>を断行した。それまで、いわば、普通に、通していた、のであろう、卒論を、一度全員落とすと宣言し、それから2週間にも及んだらうか、学生達を教室に缶詰にして、専任教員も全員連日出勤、徹底して個別指導をしながら論文を書き直させた。前年に赴任したばかりの私は、その先生の迫力に圧倒されて、とにかく一緒に走った。当時いらした、藤江先生、真柴先生も同様だった。今思い起こしてみても、そんなことが本当にできたのだろうか、と改めて思う。だが、実際、当時の廣野学部長も、また秋吉事務長はじめ事務の方々も、その他の方々も、結果としてそれを認めていた。原田先生の意志を誰も否定することはしなかった。それはできないことだった。

それから後、倫理学専攻の卒業論文は厳格に教員が読み、評価し、基準に達していない場合は決して通らなくなった。まさに大改革であった。

先生はまた、履修登録の際に、新生はもちろん専攻学生全員の登録内容を一人で本当に細かくチェックし、不要な単位を取らないように指導した。その実務的な実行力は、信じられないくらい凄かった。今日では、GPA という仕方ですべての学生の就学状況を把握するようなことになっているが、先生のされたことは、そのように数値によって何か管理するよ

原田覺教授のご退職にあたって（木阪）

うなことではなく、顔の見える一対一の関係の中で、しかも全員に対してまったく同様の対応を平等に徹底することだった。

先生は、大学というものに関する、とかくに緩い世の常識を、国士舘大学文学部倫理学専攻についてだけはまったく別の厳格なものに変えてしまわれた。そしてそういう、大学の本来の在り方を、学生に対してはもちろん、父兄に対しても、他の教員に対しても、そういうものだととにかく認めさせた。こういうことのできる人は、他に決していない。

私はその激しい原田先生と、15年間は一緒に走った。先生はここ10年程度、段々と「まるく」なられた。そして本年度を以て定年まで一年を残して辞められる。隔世の感、それのみである。

これから、時代は変わる。本来の原田先生ご定年の年、つまり2017年度を以て、倫理学専攻（現「倫理学コース」）は廃止と決められた。つい先週、つまり2017年の2月教授会の日、そのことが「通知」された。学科入試のあおりをくらったのだ。こうして、倫理学専攻は原田先生とともに始まり、原田先生のご退職とともに終わっていく。原田先生、私は先生のご退職に何か運命のようなものを感じています。

私たちは、倫理学専攻という先生の「作品」を通して、あまりに多くのことを教えていただきました。本当にありがとうございました。心より御礼、そしてご慰労を申しあげます。

倫理学専攻 木阪貴行